

ビジネスアイディアの概要

デジタルデバイスの普及に伴い、近視人口が世界的に増加しており、2050 年には世界人口の 50% (約 50 億人) が近視眼になると試算されている。近視は低年齢時に進行しやすく、視力が低下すると眼鏡を装用するが、眼鏡装用後も近視は進行するため、眼の度数と眼鏡レンズの度数にずれが生じる。先行研究において、度数の合わない眼鏡では近視の進行を抑制できないことや、読書中の眼球運動が変化し、読書速度が低下することが明らかとなっている。読書速度の低下は、学習格差に繋がる。この課題を解決するために、読書中の眼球運動や読書速度から学習に適した視力 (学習視力) を推定し、眼鏡の買換え時期を提案する技術の事業化を目指す。

ビジネスアイディアを事業化するための課題

- ・読書中の眼球運動を記録するアプリケーションの開発
- ・眼鏡を装用した状態での測定精度検証
- ・健常者を対象としたデータの集積および学習視力を予測する AI モデルの開発
- ・学習視力を維持したときの学力変化に関するエビデンスの構築
- ・本技術をライセンスする眼鏡メーカー、コンタクトレンズメーカー、および検診企業との連携
- ・小学生データ集積のための研究計画立案

事業化の見通し

本事業の初期ターゲットは、「近視で眼鏡やコンタクトレンズを装用している/これから装用する子ども」、特に、学習時間が長い小中高を受験する層 (毎年 100万人) とする。初期の市場規模は、約23億円と推定している。そのターゲットに対し、眼鏡店やコンタクトレンズメーカーを通じて、学習視力を測定できるアプリケーションを提供する。眼鏡店やコンタクトレンズメーカーは、これまで測定できなかった学習視力を測定できるようになり、顧客体験を向上させ、リピートの促進に繋がるという好循環が期待できることから、アプリケーションの導入が進むと考える。結果として、子どもの近視進行が抑制され、学習効率の改善を実現できる。

事業者情報

広田 雅和

ビジネスアイディア概要図等

